

福生飛行場ものがたり

立川 愛雄

はじめに

福生飛行場を語る前に、まず『立川飛行場』について簡単に記すこととする。

大正十一年十一月十日、首都の防衛強化するために、各務ヶ原（岐阜県）の陸軍飛行第五大隊を移駐して、立川飛行場が発足する。同十四年五月五日、飛行第五連隊と改称されるのであった。

昭和十三年八月三十一日、航空部隊の編成改正により、飛行第五戦隊と改称。翌十四年三月三十一日、千葉県柏市豊四季に移り、帝都防衛任務につくことになる。四月一日には、所沢において編成された『陸軍航空技術学校』が、立川飛行場（飛行第五戦隊跡）に設置されるのであった。

これより先、陸軍航空がいわゆるテスト・パイロットを

養成して軍用機の性能審査に着手したのは昭和五年頃であったが、昭和十年八月には、航空技術研究所の独立となった。同年末、飛行班長今川少佐は欧米の航空事情を視察して列国の趨勢に従い、従来航技研と実施学校（明野等）に分かたれてきた基本審査と実用審査機能を統合した独立機関の新設を提唱した。その結果、支那事変中の十四年十二月、陸軍飛行実験部（長 阪口芳太郎少将）飛行実験隊・整備隊が創設され航空技術学校に同居。初代飛行実験隊長には、今川中佐が発令された。そして翌十五年春、専用飛行場の完成により、立川から『福生』へ移転されたのである。

ふっさ飛行場審査部ものがたり

当時、福生村の台地上は地理的に見て一般に利用し難い場所と思われていた。しかし、こうした場所こそ飛行場に

は好適であり、そこで軍部はその主旨を福生村に伝達した。

これにより福生村役場は用地の關係地主に、昭和十四年七月四日午後四時印鑑携帯シ必ず出頭スベキ旨を通達した。

当日、福生第一小学校には、村内で笹本八十次郎外四名と、村外地主は東京大森区桐ヶ谷町一六〇番地鈴木晋一外四名の合計八六名が集合した。当時の国情から推察してこの会議において、軍部の要求通り土地売渡しの承諾が行なわれたものと考えられる。

隣村の、箱根ヶ崎村外三カ村（石畑・殿ヶ谷・長岡）組合役場でも、同日關係者が集合したが、反対の一言も発するものもなく先方の希望どうりに買収が進んでしまった。

軍部では直ちに土地価格調査の照会状を寄せてきた。これによって、土地の買収がいよいよ具体化するについて、土地買収に関して委員の選定を行ない、その結果、笹本半左衛門、田村半十郎の二氏を決定、昭和十四年七月六日陸軍航空本部に、次の様に報告している。

土地売買価格評価調書 昭和十四年七月六日			
所在地	福生村字 武蔵野	地目	畑
日光街道 以東	山林	上	七〇〇
		中	六五〇
		下	五五〇
六五〇		五〇〇	
摘要			

土地の買収に併行して、軍部は土地の測量を同年七月七日より向う一カ月間の予定で開始した。測量班員は六名が来村し宿泊して実務に当り、測量人夫は一日およそ三十人。

土地の売渡し価格は八月の初旬に至って決定し、同月土地の登記がなされ、ここに最初予定した用地が軍部に売渡されたのである。町の北部一帯で、約二百五十ヘクタールの山林中約二百ヘクタールである（『福生町誌』より）。

昭和十三年四月末、部隊から賜暇帰郷の際『武蔵野（福生）の原に飛行場ができるらしい』と聞いた（秋川市村野助治氏）とあり、事前に計画が進んでいたものと思われた。

陸軍航空本部は、株式会社浅沼組に対して次の工事を発注するのである。「立川陸軍飛行実験部新築・鉄骨及木造・一六五万八千円。工期は十四年九月—十六年一月迄とす。

飛行第五九戦隊長今川一策中佐は、先年報告上申した通りの飛行実験部を設けたからとすることで呼び戻され、隊長に就任。航空技術研究所（立川）と深いつながりがあるので、福生に設置。全国から優秀なテスト・パイロットを集めることとなり、昭和十四年十二月、次の陣容が整う。



要に応じて実験班を編成した。総人員約六〇〇名

昭和十五年四月までが編成期で、立川の陸軍航空技術学校に仮住いをしていた。飛行場の完成と、編成の完結に伴い「福生飛行場」に移駐したのであった。

同時に、福生航空整備学校新築（工費四五万五千元）工事が始まり、十六年十二月完成。福生氣象部も新設（工費三二万円）同年六月には完成する。（何れも浅沼組施工）

昭和十七年十月十五日、作戦の要求に即応して、航空兵器の審査業務を単化促進するために、航空技術研究所の改編独立と呼応して、従来の飛行実験部を廃止し、飛行実験部の実用審査部門と、航空技術研究所の基礎審査部門を統合して、「陸軍航空審査部」を新設した。

初代本部長は、坂口芳太郎中将である。

陸軍航空整備学校は、拡張増設の工事がつづけられる。

昭和十六年度（工費四五万七千元）同十八年度には、第三・四期（工費一〇二万六千元）と拡張工事が続いた。

当時、福生航空審査部偵察隊に軍属であった、わち・さんべい氏の『空のよもやま物語』光人社刊の一節を借用。

……ぼくがいた陸軍航空審査部（元飛行実験部）は、名称を見たかぎりでは、どこかの建物の中にある一つの部課としかうつらない。が、滑走路千二百メートル、総芝生の、堂々たる飛行場をもつ、新鋭機のテスト機関だった。この飛行場は、武蔵野の松林を南は砂川村（立川市）

の畑をけずりとり、東は箱根ヶ崎（瑞穂町）までに伸ばした広大なもので、その西側に、北から陸軍航空整備学校陸軍氣象部、そして航空審査部の各施設があった。

敷地を存分にとったこの航空審査部は、幅のある道路で基盤の目のように区切られ、格納庫などの飛行関係のほかに、兵舎が二棟、電機、機械、発動機整備工場、医务、食堂、本部建物など、広く分散されたかたちをとった構えだった。だから、どの部署へ行くにも、百から二百メートル以上の距離があったので、その途中で出会う上官の数は、少なくとも二名はあった。そのたびに、敬礼をしなければならぬ。……新兵さんはつらかった。……航空審査部ときけば、建物のなかの一部署、ひとつの部屋的印象をあたえるが、れっきとした軍用機の検査機関で、各航空会社から出来てきた試作機の適否をきめる航空隊のひとつであり、戦、偵、爆、攻撃と分かれた各隊のパイロットは歴戦のつわものぞろいだった。

……」
昭和十九年三月、福生飛行場に「陸軍航空整備師団」が編成され、それにより立川の陸軍航空技術学校は分遣所となる。

歴代航空審査部本部長（発令及転出）

初代	坂口芳太郎中将	17	10	15	18	5	19
二代	橋本 秀信少将	18	11	1	18	11	1

航空本部兼大本営。 41

三代	中西	良介少将	18 12 27	19 10 2	第五航空軍参謀に。
四代	寺本	熊市中将	19 10 2	20 4 30	航空本部長となる。
五代	緒方	辰義中将	20 6 21	——	終戦

敗戦

昭和二十年八月十五日、全軍特攻を志し不屈の闘魂に燃えていた陸軍航空の猛者も、ひとたび聖断を仰ぐや、『承諾必謹』あくまで聖旨に副うて行動することになった。

日本にとって一番長い日であった。陸海軍の、そして大日本帝国の真の、終焉の日でもあった。

陸軍大臣安南惟幾大將は割腹自刃した。特攻隊生みの親大西滝次郎海軍中将も自刃（十六日午前二時……「吾死をもつて旧部下に謝せんとす」と）。陸軍航空本部長前航空審査部本部長寺本熊市中将も、陸軍航空と運命をとともに自決。審査部総務部長隈部正美少将は、十五日夜、多摩川原に

おいて家族もろ共自決された。

技研爆弾関係部長兼審査部員水谷栄三郎大佐は、十六日正午、自決されその死を悼む人達により墓碑が建立された。

「碑文」

故陸軍大佐水谷栄三郎 法諡 研光院清烈義榮居士

維時昭和二十年八月十六日正午頃福生町加美ニ在リタル軍塚壕舍ニ於テ終戦ヲ一期トシテ壮烈ナル自決ヲ遂ケラル 氏時ニ行

年四十五歳 遺書ニヨリ遺骸当所ニ葬ル 終戦茲二十周年ヲ迎
ユ氏ノ生前ノ徳ヲ偲ビ追慕ノ情止マス吾等一同相図テ浄域ヲ莊
嚴シ靈塔一基ヲ建テ以テ冥福ヲ祈念ス

昭和三十年八月建立 清岩会有志

市内の臨濟宗福生山清岩院墓地に建立されている。

昭和二十年九月三日、占領軍先遣部隊が福生飛行場に進駐する。この日から『横田基地』と変貌するのであった。

九月十三日、大本営はその姿を消し、十月十五日、参謀本部は廃止され、十月三十日、陸軍省は、陸軍航空本部もともに解散された。

そうして陸軍航空は、その思い出だけを関係者の記憶にとどめて、四十年の歴史を閉じたのであった。

おわりに

以上は、元福生航空審査部部員大手吉次氏、浅沼組浜垣寿一郎氏、原田良次氏、わち・さんべい氏からの資料、さらに当時飛行場に、応召・勤務された方々よりの聞き書きを含めて記述したもので、御協力のほどを感謝し、御叱正を乞うものであります。

(たちかわ・あいお 福生市史編さん委員 志茂在住)

付 「福生飛行場秘話」

「その(1)」

昭和二十年一月九日。この日マリアナ基地を発進したB29―七二機は、中島飛行機武蔵工場をめざし、潮岬より本土に迫った。この日の戦闘は白昼の東京上空で、衆人環視の中の大格闘戦となり、市民は始めて見る日本機の健闘を目の当り見て感動した。体当り自爆機三、戦死者は三名。生還者は三名。当方の戦果は、撃墜一一機、うち体当り六機

丹下少尉、粟村准尉、幸軍曹の三氏は、無念自爆戦死。

震天制空隊の至宝と称された粟村尊中尉(二階級特進)の

夫人貞子さんは、熊川六一六斎藤伊三郎氏六女で市内に住していた。夫人も遺児も今は亡く、御冥福を祈るのみ。

「その(2)」 『空のよもやま物語』より

昭和二十年二月十六・七両日、米空母機動部隊の艦上機は、東京都下各地区基地飛行場等を波状攻撃し相当な被害を与えた。十六日四回、十七日三回の空襲警報は、実に三十三時間にもおよんだ。これらは敵の硫黄島攻略に対する

呼応作戦で、わが方の予想をはるかに上回る熾烈なものであった。福生飛行場も不意をつかれ大混乱となった。

迎撃に舞い上る戦闘機、いったん帰投して燃料と銃弾を補給し、ふたたび迎撃に飛び立とうと、誘導路へ入っていく「隼」が急にとまってしまった。

一回目の帰投後ふたたび出撃するため愛機へ歩いて向かおうとするのが倒れたのである。はかない最後であった。

この人こそ、駐米大使来栖三郎氏長男良(青い目)の中尉であった。プロペラ禍——のためとだけ、お伝えしておく。……葬儀は、翌日、ご両親列席の上行なわれた。

壮烈なる名誉の戦死……B29迎撃中に被弾して、「帰投後の戦死」となったものであるが、いづれも「時局」という時の流れに合わせた賛辞に思えた。(わちさんべい氏)

「その(3)」 『空のよもやま物語』より

八月十五日正午、ピストと戦闘隊のエプロンにつづく芝生のうえに、戦、偵、爆の全員が整列し、佐官級は最前列だった。放送の機械がよくなかったのか、調節が悪かったのか、ふるえた声であった。

「忍び難きを忍び、耐え難きを耐え……」「軽拳盲動するなかれ……」と、最後の「汝臣民よく朕が意を体せよ」しか、ぼくにはよく聴きとれなかったが、その内容は理解することができたように思えた。

にぎりしめていた手の力がぬけて、ぬいた刀を、かまえた銃を思わず落としてしまふ心境と同じである。……………

この日の午後から翌日にかけて、神奈川県厚木の海軍機が低空でやってきて、がり版刷りの檄文を投下して行くようになった。

「陸軍はなにをしているか」「無条件降伏はおおみごろではない。重臣たち側近の意思である。わが海軍は、最後まで戦うであろう」「陸軍は決起せよ！」こんな内容のビラであった。

これに呼応したのかどうかはわからないが……

やがて、沖繩への突入。奥多摩への立て籠り。がり版刷りなどの不穏な空気も、「盲動をつつしめ」といわれた意を体してか、しぜんに立ち消えとなり、飛行場は航空審査部創設前の静けさにかえった。

翌日から、海軍機にかわって、米軍のグラマンが飛来するようになり、「エプロンに、それぞれの機を並べ、プロペラをはずして、その前に置け」と、通信筒で指示してきた。低空で投下した一機の上空で、「万一」にそなえて、旋回をくりかえす二、三機がいた。憎らしく思った。

米軍は疑いぶかかった。連日、執拗にやってきて、こんどは、「発電機を取りはずして、プロペラの前に置け」ときた。単発機なら左右の二個、双発なら四個である。これなら急発進することもあるまいとよんだのだろう。空から

おそろおそろの『武装解除』であった。……………

(わちさんべい『空のよもやま物語』より)